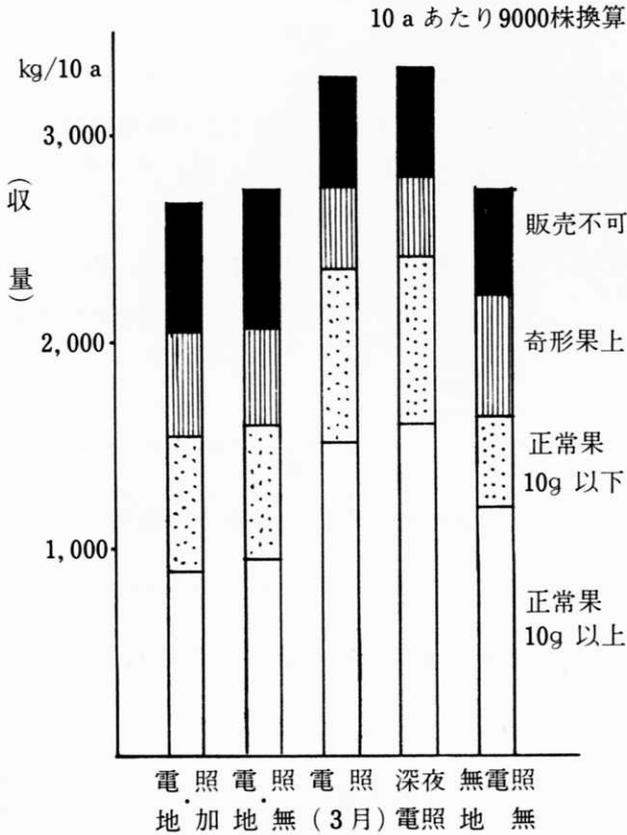


3 時期別収量は1月末日までは電照効果ははっきりせず、むしろ無電照区がよかったが、2月・3月では電照区がすぐれ増収した。地中加温の効果も2月・3月になって現われている(第2図参照)。

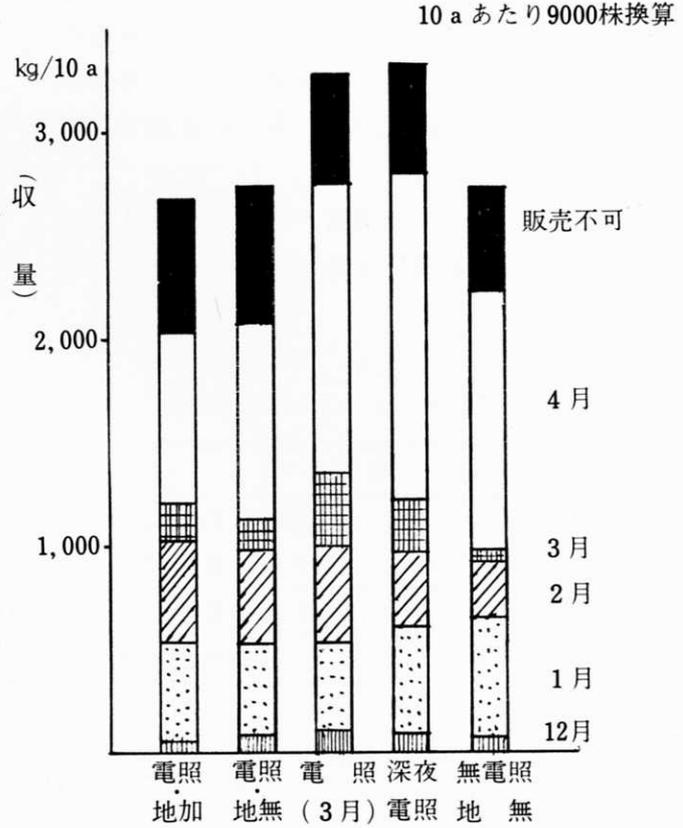
4 電照処理を3月末日まで延長した区は3月・4月の収量が増加した。なお深夜電照区が増収したこと

は、処理区をシルバーポリフィルムで仕切ったため、夜温が他区よりも1~2℃高く経過したことも一因と考えられる。

5 以上の結果、当地においても促成型長期栽培は可能と思われる。



第1図 品質別収量



第2図 時期別収量

イチゴ高冷地苗利用による電照半促成に関する試験

佐々木丈夫*・佐藤忠夫*・鈴木信隆*・和泉昭四郎*

1 ま え が き

宮城県では、イチゴの早出し栽培はダナーの株冷蔵半促成栽培が主体で2月下旬から6月下旬まで収穫が行われている。

さらに収穫期の前進をはかるため、高冷地育苗を行って花芽分化を促進し、電照処理による休眠打破およ

び山下げ時期について検討した。

2 試 験 方 法

供試品種はダナー、宝交早生を用いた。

栗駒町耕英(840m)で7月25日挿苗して育苗を行い、名取市高館の園試ビニールハウスに定植した。

苗の挿苗期から11月18日の電照開始期までの低温遭

*Takeo SASAKI, Tadao SATO, Nobutaka SUZUKI, Shoshiro IZUMI (宮城県園芸試験場)

遇時間は250時間、11月28日の電照開始期までの低温遭遇時間は350時間であった。

試験区の構成は第1表のとおりで、山下げ定植期と休眠打破の組み合わせを行い、9月20日植・電照区、10月2日植・電照区、9月20日植・GA区、10月2日植・GA区を設けた。

第1表 試験区の構成

区 分	GA処理期	電 照 開 始 期	保 温 開 始 期
9月20日植・GA区	12月4日	月 日	11月29日
10月2日植・GA区	12.5	—	〃
9月20日植・電照区	—	11.18	〃
10月2日植・電照区	—	11.28	〃

休眠打破は電照およびGA処理を行った。なお、電照処理は16時間日長を確保するために夜間照明(地上

第2表 ダナー、宝交早生の育苗地別花芽分化調査

品 種	育 苗 場 所	9月15日	9月20日	9月25日	9月30日
ダ ナ ー	園 試 (標高 35m)	A	A	B	B~C*
ダ ナ ー	耕 英 (標高 840m)	GP	C	C	C
宝 交 早 生	園 試 (標高 35m)	B	A	B	C~D*
宝 交 早 生	耕 英 (標高 840m)	GP	B	C	C

*園試苗は10月1日に調査した。

注. アルファベットは頂花房第1番花の花芽分化のステージを表す。
GPは未分化生長点, Aは生長点の肥大初期, Bは生長点の肥厚期,
Cは花芽分化期, Dはがく片形成期を示す。

2 電照およびGA処理による生育の差異について
草幅、草高、葉柄長の初期生育をみた結果、両品種とも9月20日植・電照区、9月20日植・GA区が10月2日植・電照区、10月2日植・GA区にまさったが、のちには9月20日植・電照区、10月2日植・電照区が9月20日植・GA区、10月2日植・GA区にまさる傾向がみられた。

両品種における電照およびGA処理による休眠打破は葉柄長の伸長経過の結果、9月20日植・電照区、10月2日植・電照区は1月以降、葉柄長が急速に伸びたが、9月20日植・GA区、10月2日植GA区は葉柄長の伸長がゆるやかで、おそくまで株のわい化が見られた(第1, 2図)。

3 電照およびGA処理による収量の差異について
収穫開始期の前進および総収量を知るためにアール

1.5mに100Wの白熱灯を10a当たり40個設置)を行い、3月下旬まで続けた。GA処理は10ppm液を1株当たり3~5cc散布した。

山下げ時期は9月20日と10月2日の2回とした。山下げ後、苗はただちに定植した。

供試ほ場の栽植密度はベッド幅90cm, 株間30cm, 条間40cmの2条植とし、1区46株, 2区制とした。

3 試験結果

1 高冷地および平地における花芽分化期の差異について

第2表に示すように、ダナーの花芽分化期は、耕英では9月20日ごろ、園試では10月1日ごろと推定され、高冷地の花芽分化は平地に比べて10日早かった。

宝交早生の花芽分化期は耕英では9月22日~23日ごろ、園試では9月27~28日ごろと推定され、高冷地の花芽分化は平地に比べて5日早かった。

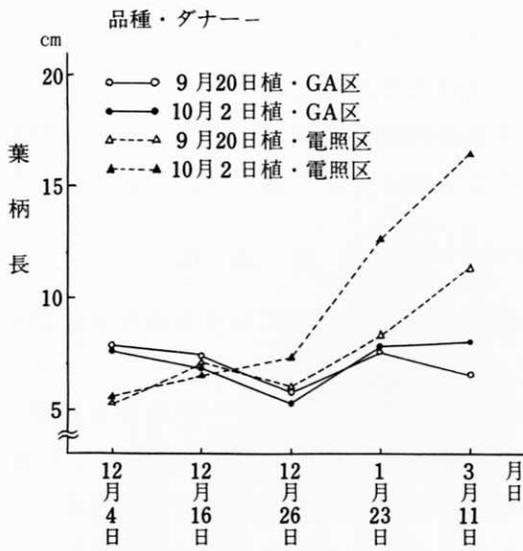
当たりの時期別収量をみた結果(第3図), 両品種とも収穫は9月20日植・電照区, 10月2日植・電照区が1月下旬から, 9月20日植・GA区, 10月2日植・GA区が2月上・中旬からだった。

月別収量をみると, 両品種とも9月20日植・GA区, 10月2日植・GA区の収量は4月にかなり低下がみられたが, 9月20日植・電照区, 10月2日植・電照区は低下がみられなかった。

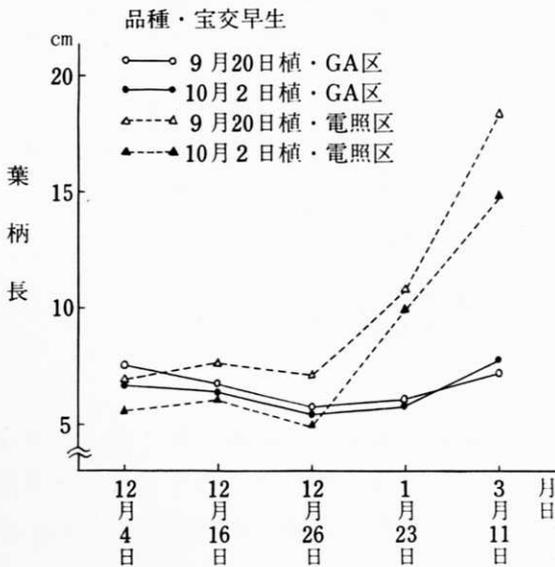
総収量では両品種とも9月20日植・電照区, 10月2日植・電照区は, 9月20日植・GA区, 10月2日植・GA区にまさった。

ダナーでは, 10月2日植・電照区は初期収量, 総収量が一番高かった。

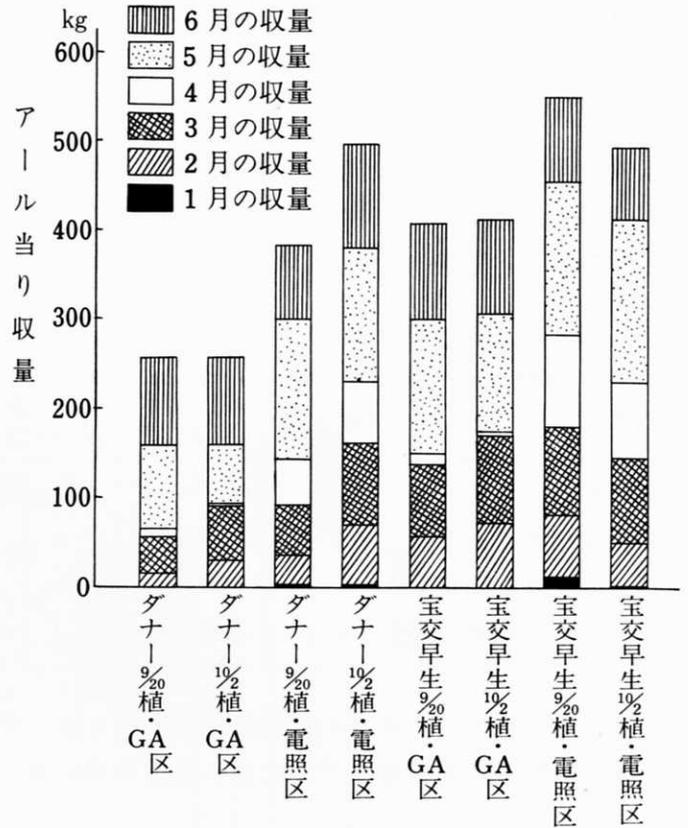
宝交早生では, 9月20日植・電照区は初期収量, 総収量が一番高かった。



第1図 GAおよび電照処理による葉柄長の伸長経過



第2図 GAおよび電照処理による葉柄長の伸長経過



第3図 電照およびGA処理によるダナー・宝交早生の時期別収量

4 む す び

以上の結果、休眠打破は、両品種とも電照処理が有効であるが、ダナーと宝交早生では山下げ時期、電照開始期に差が認められた。

ダナーの10月2日植・電照区と宝交早生の9月20日植・電照区の収穫開始期は従来の株冷半促成栽培(ダナー)に比べて1カ月前進し、収穫期の前進が認められた。

したがって、ダナーの株冷蔵半促成栽培よりも早い作型として、高冷地苗を利用したダナーの電照半促成(10月上旬山下げ)および宝交早生の電照半促成(9月下旬山下げ)が有望と認められた。